

四旬節第四主日

2012.3.18

ヨハネ 3・14-21

私たちはカトリック信者としてどのような神さまを信じているのでしょうか。私たちは、それぞれめいめいが思い描く神を信じて、神を信じる者となったわけではありません。洗礼を受けて、カトリック信者となることによって、私たちはカトリック教会に伝えられてきた神への信仰を生きる者たちとなったのです。私たちは、イエス・キリストにおいてこの世界にご自分を示された神を信じて生きた人々の信仰を受け継いで、その人々が信じた神を信じる者たちとなったのです。

「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠のいのちを得るためである。」今日の福音が告げている、このような神への信仰を受け入れて、私たちは神を信じる者たちとなったのです。私たちが信じている神はこのような神です。この世に生きる私たち一人ひとりに、この世に生きる全ての人に、愛する独り子をお与えになった神を信じて生きるということが、私たちの神への信仰です。神はこの世界の歴史の一点において、その独り子をお与えになることによって、この世界に生きる私たち全ての者に、その愛を注いでくださったのです。

「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」今日の福音のこのことばは「神は世を愛された。それゆえに、神はその独り子を世にお与えになった。」というふうにも訳すことができます。

私たちは洗礼を受けて、教会に伝えられて来たキリスト教の信仰を受け入れることによって、今日の福音に告げられているこのことが、イエス・キリストにおいて事実となったことを信じる者たちとなったのです。イエス・キリストは、この世に生きる私たち一人ひとりに、この世に生きる私たち全ての者に、神がその愛を示すためにお与えになられた神の独り子なのです。その独り子に向けられている愛をこの私たちの世に注ぐために、神は愛する独り子を私たちの世にお与えになったのです。

それにしても、「神の独り子」という表現は独特な表現です。今日の福音の箇所を読んだだけでは、何故、どのような意味で、イエス・キリストが神の独り子と呼ばれているのか理解し難いかも知れません。このことを、理解するためには、先週も振り返った、ヨハネ福音書の1章14節に語られていることを思い出してみる必要があります。「ことばは肉となって、私たちの間に宿

られた。私たちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理に満ちていた。」と語られていました。栄光とは、神だけが持つ、神の本質としての栄光です。神はその栄光をもって、ご自分を現されるのです。「私たちはその神の栄光を見た。」と告げているのは、弟子たちをはじめとする、イエス・キリストを信じた「私たち」です。イエス・キリストを信じる「私たち」はイエス・キリストにおいて、肉となって私たちの間に宿られた、万物の創造のはじめから神とともにあった、神の創造のことばが放つ神の栄光を見たのです。こうして、万物を創造することによって示されている神のことばが放つ神の栄光は、この世の闇を照らす光として、肉となって私たちの間に宿られた、それは、私たちをそのみもとに呼び集め、私たちを信じる者としてくださったイエス・キリストに他ならないとヨハネ福音書は告げているのです。

神は、そのことばによって創造されたこの世界に対して、ご自分の思いを、ご自分の内なる、この世界の対する愛の全てをそのことばによって表明されたのです。イエス・キリストはその神の愛を表明することばとして、肉となってこの私たちの世界に来てくださったのです。肉となって私たちの間に宿られた神のことばであるお方は、神の独り子と呼ばれています。何故なら、肉となって私たちの間に宿られた、神の独り子と呼ばれるそのお方は、私たちの世界に神の愛の肉声を響かせてくださるからです。私たちはイエス・キリストにおいて神の私たちの世界への愛のことばを聴くのです。

今日の福音のはじめには、「モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければならない。それは信じる者が皆、人の子によって永遠のいのちを得るためである。」というイエスのことが響いています。これは、人の子となって私たちの世界に来てくださった神のことばであるイエスが告げたことばです。モーセが荒れ野で蛇を上げたように言われているのは、旧約聖書の民数記 21 章に語れていることを指しています。約束の地を目指す荒れ野の旅の途中、その過酷な現実にはたえられなくなった人々は、自分たちをこのようところに導いたモーセに不平を並べ立て、モーセを通して与えられた神の導きに反逆します。すると、神は人々の中に炎の蛇を送り込まれ、その蛇に噛まれた多くの人々が命を落としました。人々が自分たちの非を認めて、蛇を取り除くように願った時、モーセは神の命令に従って青銅の蛇をこしらえて、旗竿の先に掲げました。蛇に噛まれた人々がその青銅の蛇を仰ぎ見ると、それだけで命が助かったというのが、民数記の物語です。

「モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければならない。」というイエスのみことば、十字架の上に上げられた、人の子となられた

神の独り子イエスのおことばです。神はこのことのためにその独り子を、わたしたちの世界に送ってくださったのです。十字架に釘付けにされ、十字架に上げられたイエスは、ご自分のいのちを私たちのために与えつくしてくださったのです。そのイエスのお姿のうちに、私たちのこの世界にその独り子を送ってくださった神の愛が示されているのです。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」と今日の福音が告げていることは、イエスの十字架のお姿によって全うされたのです。十字架の上にその命の限りを与え尽くされた、人となられた神の独りイエスによって、私たちへの神の愛はこれ以上にはない姿で示されたのです。

私たちはカトリック信者として、このような神を信じています。このようにして私たちへの愛を示してくださった神の愛を信じています。人となられた神の独り子イエス・キリストにおいて示された神の愛を信じています。

人々に死をもたらした蛇は、それを仰ぎ見る時、人々のいのちを回復させました。旧約の民数記に語られているこのことは、イエスの十字架において現実のこととなったのです。イエスの十字架を仰ぎ見る私たちは、そのイエスの死によって、神の子として生きる永遠のいのちの恵みをいただくことが出来るのです。

ここに、私たちがカトリック信者として生きる、私たちの信仰のすべてが、要約されて示されています。間もなく迎える聖週間、このような私たちの信仰が、より深く私たちの中に染み通ってゆく恵みを祈り求めたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高